

建設候補地実感に意義

測定器研究チーム一関で会議

代表者ベンケ氏に聞く



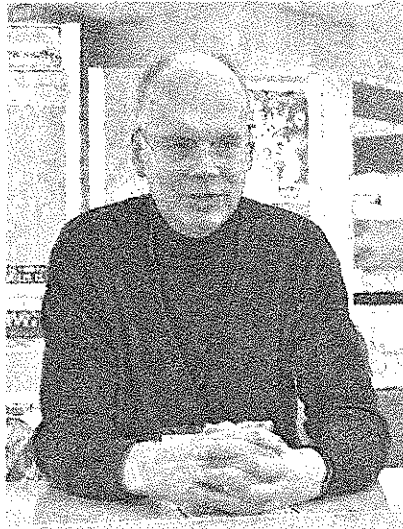
研究者が建設候補地を自分の目で見ることで、ILC実現後は『ここで研究をする』と実感できるのは意義がある」

国際リニアコライダー(ILC)計画で用いる測定器「ILD」研究チームの国際会議が20、22日、一関市で開かれている。代表者のティーズ・ベンケ氏(57)＝ドイツ電子シンクロトロン教授＝に建設候補地である本県開催の意義やILCの期待を聞いた。

(聞き手は一関支社・三浦隆博)

「一関市開催の意義を聞かせてほしい。」

「同様の会議を世界各地で開催しているが、海外の



「日本が誘致表明しないとILC計画は進まない」と強調するティーズ・ベンケ氏

「ILCは大きなプロジェクトで、一つの国だけでは実現できず、国際協力がある」

「欧州の次期素粒子物理5カ年戦略は今年からつくり始め、その後に米国も同様の計画をつくる。日本の意思表明がなければ各計画にILCを位置付けることも、協力を得るのも難しく

不可欠だ。日本がリーダーシップを取って『ILCをつくる』と決意を表明すれば、他国は支援する。その段階を踏まないと計画は進まない。今年の誘致表明を期待している」

「逆に言えば、今年表明しなければ国際協力を得るのは難しくなるのか。」

「地元の方々には親切で、きれいな風景があり、まちはコンパクトで暮らしやすそう。しかし、生活するとなれば、店での注文などさまざまサービス面で多言語対応が必要だと感じる。これは乗り越えられる課題だし、それを整えることでインバウンド(訪日外国人客)も増え、世界中に知られる地域になる」